

資料

コロナ時代の心理学教育

— 主に「心理学概論」、「心理療法学」、 「心理的アセスメントの理論と実践」の実践から —

高石 浩一

COVID-19 は、恐らくは数十年かかったであろう従来の大学教育の改変をわずか数か月間に圧縮し、その改変は今もまだ進行中である。意識的にも無意識的にも、「ありうべき大学教育」の姿を、これほどドラスティックに変更せざるを得ない時代が、筆者の在任中に訪れるとは夢にも思っていなかったが、それだけにすべての大学人の体験が、今は後学の礎となるであろうという期待のもと、とりあえずの現状を資料としてここに記しておきたい。その際、科学者としてのペルソナがもたらす具体的現象学的事実と、心理士（師）としてのそれが語らしめる内省的省察、さらには周囲の人間関係への参与観察に基づく知見の混在が予想されるが、それ自体が現状の「ありのまま」の姿であろうと確信し、ここに報告する次第である。

ちなみに筆者が担当する春学期の授業は、主に1年次生216名を対象とした講義「心理学概論」、2年次生以降の137名の学生対象の講義「心理療法学」、そして初年次大学院生30名対象の演習「心理的アセスメントに関する理論と実践」である。すべてオンラインが原則の春学期授業体制のもと、このそれぞれに異なる工夫を要したが、基本原則としては「できる限り従来の教育内容の質を落とさないこと」を目標に、実現可能な方策を探った。本論はその試行錯誤の経過報告である。

0. コロナ発生から授業開始まで

2020年1、2月当初は中国武漢の地域感染が毎日のように報道されたが、我が国における受け止めはさほど深刻なものではなく、少なくとも2019年度のカリキュラム終了時までは、宿泊を伴う「臨床心理学実践演習（グループ・アプローチ1）」の授業も禁止されることなく2月中旬に行うことができた。それまでインフルエンザや風邪の流行期にあたっているこの授業は、当日キャンセルの学生が必ずおり、そのキャンセル料の回収が悩みの種であったが、この年に限って一人もキャンセルが出なかったのは、以降当面、こうした授業形態が不可能になることを予兆する徴しであったのかもしれない。

3月に入って、いよいよ感染がパンデミックの様相を呈するようになり、早々に東京大学が4月からオンライン授業に踏み切ったという情報が入るようになって、全国の大学人と共に、我々も急遽オンライン授業に対応することが求められるようになった。

当時、まず脚光を浴びたのは無料である程度の機能を持つ Zoom であった。これは東京大学をはじめとする全国の国立、私立大学の多くが標準仕様として採用した Web 会議サービスであり、とりわけ大学の講義やセミナーへの汎用性の高さが評価されたが、一方で当初からそのセキュリティーをめぐる批判が相次いだ。と

りわけ、密室での面談を基軸とする心理臨床家としてのペルソナを併せ持つ心理系教員は、セキュリティについては敏感であったが、現実的に他に多くの選択肢がない以上、本学が推奨する Meet か、自費を前提とする Zoom のいずれかを、授業用プラットフォームとして採用するしかなかった。

事実上、3月は対面が許されない状況で、自宅からオンライン授業を工夫するためのセミナー、研修、情報収集、設備投資に明け暮れた(授業資料の持ち帰り、パソコンの買い替えから自宅背景の模様替えまで、その準備は多岐にわたった)。併せて大学の基幹情報提供システム、ユニバーサル・パスポート(通称ユニパ)が、大幅なバージョン変更を行ったため、それへの順応に追われる日々でもあった。

4月になって、授業開始の遅延が現実的になり、併せて学生たちの通信環境の脆弱性がアンケートを通して明らかになるにつれて、講義や演習の形式、情報発信や資料提供のタイミングなどが問題になってきた。しかしながら実際の授業が始まる前の段階では、こうした懸念も予想の域を出ることはなく、不安と楽観論がないまぜになった奇妙な高揚感の時期であったと言えよう。

この時期、とりあえずの講義準備として筆者が繰り返し行ったのは、学生との模擬授業の実験であった。Zoom、Meetを用いて、SA予定の学生たち相手に画面共有、パワポ資料の見え方、レジュメ資料の文字の見え方など、彼らに負担にならないようにできるだけ時間や回数を減らして、短時間で要領よく授業の工夫を積み上げていった。実際、パソコンを所持している学生比率は少なく、事実上オンライン授業はケータイの小さな画面を通してしか成立しない。その想定の下で、従来とできる限り同レベルの授業を保障するには、いかなる工夫が必要

か、試行錯誤は続いた。一部、内容的な変更も必要であったし、パワポの入れ替えも行った。Zoom、Meetの制限(例えばZoomのベーシック契約では、100人を超える会議=授業はライブでは行えない、Meetは250名まで対象であるが、ブレイクアウト機能がなく、従来行っていた小グループに分かれてのディスカッションが不可能である、など)に基づいて、授業全体のレイアウトを構築していくしかなかった。そんな中、学生であるSAの存在は非常に役に立ってくれた。単に授業補助ではなく、学生目線での意見や感想を幅広く寄せてくれたからである。大学院の演習についても、授業開始前に数度、院生全員参加の授業形態をシミュレーションして、Zoomのブレイクアウト機能の機動性を確認した。そうして、冒頭に掲げた3つの講義を、「心理学概論」(Meetライブ型)、「心理療法学」(オンデマンド型)、「心理的アセスメントの理論と実践」(Zoomライブ型)で組むこととし、5月の連休明けからの実際の授業に臨んだ。

1. 「心理学概論」の授業—その工夫

オンライン授業どころか、大学の講義そのものに慣れていない1年次生を中心とした216名の登録学生に、オンライン・ライブで授業を試みることは明らかにチャレンジであったが、もともとのパワポ資料が数年かけて熟成され、問題提起→ディスカッション→解説という問題解決学習の先取りを行っていたこともあって、その内容には不安はなかった。問題はいかに学生をライブ授業に参加させ、また双方向性を確保しつつ、彼らのライブ参加のモチベーションを維持するか、ということにあった。

そのための具体的仕掛けとして、①今まで紙面ベースで求めていた感想、質問などのフィー

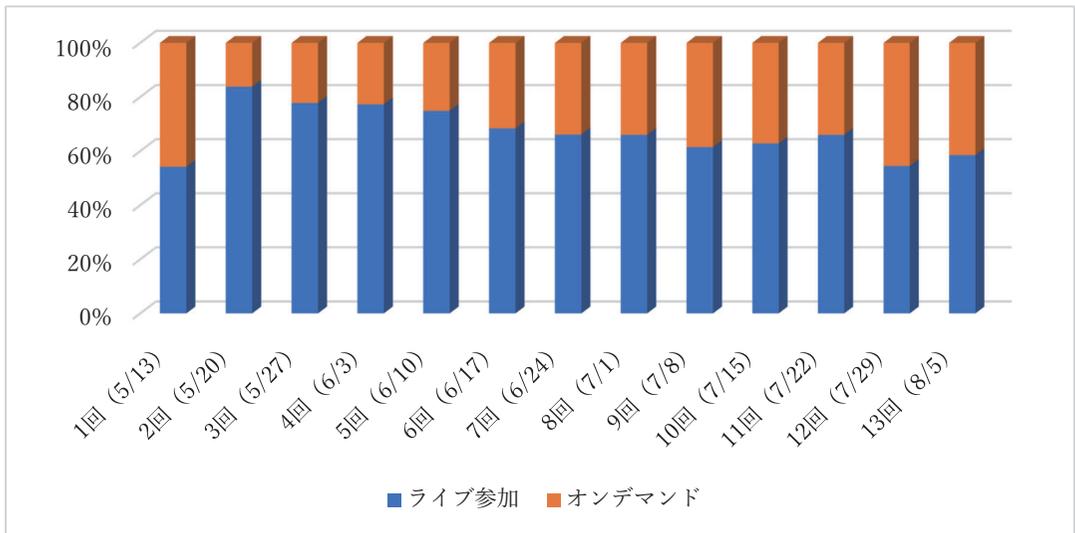
ドバックを Google Forms で提出させること、
 ②そこでの質問、分からなかった所を中心に、
 次回授業開始時に教員が言及、解説すること、
 ③授業中の質問はチャット機能を利用し、SA
 が確認して、授業の切れ目に SA から教員に質
 問として口頭で投げかけられるようにしたこ
 と、④その他、適宜教卓実験を行い、学生の反
 応をチャット機能を利用して集約するなど、ラ
 イブ感を盛り上げる工夫を行ったこと、などが
 あげられる。

授業資料は平均して A4 判 1 枚当たりパワポ
 6 枚の資料が 4～6 ページ分、そのままプリン
 トアウトできる PDF ファイル形式にして、印
 刷準備の時間的ゆとりをもたせるべく、毎回授
 業開始前週に「授業資料」としてユニバにアッ
 プした。同時に、ライブ授業参加 URL、授業
 終了後提出の Google Forms 課題の URL も「掲
 示板」と「授業資料」にアップした。さらに授
 業終了直後には、録画した授業動画も同じく「授
 業資料」にアップした。授業資料のサンプル(資
 料①)、Google Forms のサンプル (資料②) は
 本文末に掲載している。

こうしてライブ授業とその録画を毎回オンデ
 マンド資料としてユニバに登録し、Wifi 環境
 が整わない学生の学習にも供した。その結果、
 ライブ授業参加へのモチベーションは大きく下
 がることなく、平均して約 6 割以上の学生がラ
 イブ授業に参加した (表①)。これは、録画ビ
 デオの 1.5 倍速、2 倍速での再生を示唆したに
 もかかわらず、現場のライブ感を好む学生の存
 在が一定数以上いたことを意味しており、他の
 多くの授業がオンデマンドの中で、学生が「生
 活リズムをつけるうえでも役立つ」とコメン
 トしてくれたことから見ても、学生の動機づけ
 の側面で、一定の成果を上げ得たのではないかと
 考えられる。

また、ここで「評価」についての工夫も付言
 しておきたい。例年、各回で学習したキーワ
 ード、感想、質問を 1 セットとして毎回のフィ
 ードバックを紙ベースで求め、そこから代表的な
 質問を抽出、次回の授業の冒頭に取り上げて回
 答する、という形で双方向性を担保していたが、
 そうした毎回の「課題」を今年度は Google
 Forms で提出させた。それと共に、例年は最終

表① 「心理学概論」ライブ授業参加率の推移



回において、授業全体に関わる質問、感想を手書きレポートで求めていたが、今年度はそれを学生に「写メ」らせ、最終回の Google Forms に添付させるという方法をとった（このアイデアは学生側から出た！）。中には、もともとのテキストに直接 word で書き込んでファイル添付してくる者もいたが、全体として全く混乱なく、殆どの学生が読み取り可能なサイズで手書きレポートの「写メ」画像を添付してきた。教室の板書をメモる代わりに、写メる昨今の学生の、面目躍如といったところであろう。

毎回の課題で75%、最終回の添付レポートで25%の評価を行ったが、9回以上の授業出席（課題提出）者の合格率はほぼ100%で、例年と同じような成績分布になった。

こうした評価のための課題提出は、汎用性の高い Google Forms が最も得意とするところであり、「課題提出をしたか否かを忘れたので確認して欲しい」という学生に、「リクエストに応じて、回答者にコピーを送信」機能を付与することで、そうした要請に即座に応えることができた。また、毎回150名程度の（最終的には200程度）の質問、感想をチェックする上で、Google Forms から連動して作成されるスプレッドシートは極めて有用であった。Excel と同様、提出時間順、学籍番号順などの並べ替えがワンタッチで行え、また一枚のシートにすべての反応がまとめて読める形式は、きわめて重宝した。例年、SAに紙ベースで提出された「振り返りシート」の並べ替えの作業を30分以上かけてやってもらっていたことを考えると、コロナ禍はこうしたデジタル化の貴重なチャンスであったと言える。

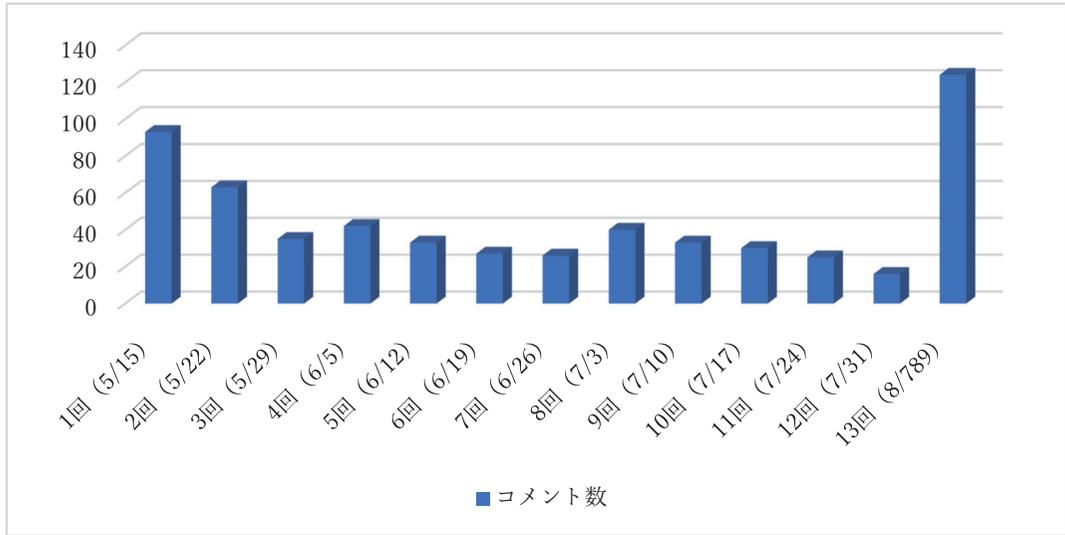
2. 「心理療法学」における工夫

ここで比較のために、オンデマンドで行った講義のアクセス数をカウントできればよかった

のだが、そうした資料は手元にはない。主として2、3、4回生を対象に、臨床心理学の知見に関する知識伝達と、その整理とまとめを授業目標とする「心理療法学」の講義は、結果的に最初の数回をライブで行い、6月からは学生の要望と、筆者の時間的制約からオンデマンドに切り替えた。コメント、感想、質問の提出をノルマとしなかったため、コメントしたい学習意欲の高い学生の実数のみが反映されている数値ではあるが、Google Forms で集約されたコメント数の推移を以下の表②に掲げる（ちなみに全登録者は137名であった）。なお、ここでの質問に対して、次回の授業開始時に10分程度答える形で、双方向性は担保した。

ここで8回目にコメント数の微増が見られるが、実はこれは必須ではないコメントを返してくれる学生の努力に報いるべく、コメントを複数回している者には、テスト成績に加点する旨を伝えたことによるものと考えられる。しかし、その効果はさほど続かず、むしろ「途中で評価方針を変えるのはいかがなものか」と反発が出ていたことは、反省を込めて付言しておきたい。高等教育における学習は、本来内発的動機付けに基づくものであるべき、という持論を自ら歪めてしまったことについては、忸怩たる思いである。また、こうした「コメントを求める」教員の心理に、自らの講義に対する即時的な評価（とりわけ自尊心を高めてくれるような高評価）を求める傾向、いわゆる教員の自己愛的傾向が潜んでいることには、あえて自覚的でありたいと思う。コメント数の多さに一喜一憂する教員は、SNSで「いいね」の数を稼ごうとする、いわゆる承認欲求の強い YouTuber と何ら変わらない。春学期の学生たちの「課題が多すぎる」という不満の多くが、こうした一人一人の教員の承認欲求にこたえることに飽きた学生たちの叫びであると解すれば、むべなるかな、と思う

表② 「心理療法学」コメント数



次第である。

なお、最終13回目はユニパを用いた60分間のオンデマンド・オンライン「テスト」を行った。これは従来持ち込み不可で行われた問題と同レベルの問題を「テスト課題」として提示し、「一時保存」による途中休憩を認めつつも60分間の「随時試験」(3日間の試験期間中に、随時開始)で行ったものである。これ自体、初の試みであり、その成否が懸念されたが、結果的に登録者137名中の実受験者124名が受験し、成績はほぼ例年並みであった。オンライン状況下でも、問題が適切であれば、ある程度知識を問う形の試験も成立しうることが明らかになったことは収穫であった(細かな学生側からの訴えとして、「回答を書いている最中に突然カーソルが行頭に移動し、長い文章を書く上で非常に書きづらかった」というコメントがあった。恐らくはユニパの自動更新のタイミングでカーソル移動が起きているものと考えられる。重要な指摘としてあえて掲げておきたい)。

3. 「心理的アセスメントの理論と実践」— 大学院演習科目における工夫

大学院の演習科目であると同時に、公認心理士の資格要件に関わる必修科目である「心理的アセスメントの理論と実践」は、昨年度開講の比較的新しい科目であり、十分熟成された内容を伴ってはいない筈であったが、実は科目化される十年以上前から、通年にわたる研究会として実施してきた経緯があり、そこでの成果を踏まえて、新たに公認心理士向け授業として整理し直した科目である。全体の構成としては①多種多様な心理検査の紹介とその保険点数の確認、②心理的アセスメントの概要と倫理的課題、③医療、教育、福祉、司法など、各領域に関わる心理検査の実際、④テストバッテリーと心理所見の書き方、が中心となっており、授業方法としてはグループディスカッション、反転授業を大胆に取り入れている。

オンラインが確定した春学期において、従来の形式をどこまで踏襲できるか、そのためにはどういったシステムが必要であり、また事前準備として何が必要か、ということをも具体的に明

確化することが3月、4月段階での焦眉の課題であった。とりわけグループディスカッションを成立させるためにはZoomのブレイクアウト機能は不可欠であり、また反転授業を行うにあたって、事前のグループ学習とその資料の提供は、前倒して院生たちの手元に早く届ける必要があった。もちろん、ライブ形式の授業参加を前提とした上で、著作権問題をある程度意識しながら心理検査を行うという難問には頭を悩ませた。最終的には、ほぼ全員がライブ授業に参加してくれたおかげで録画の必要性がなくなったことは、僥倖であった。

最初の数回は資料とパワポによる講義であり、特に問題なくライブ授業を行えたが、授業開始前に全員参加でZoom会議にアクセスし、ブレイクアウトルームの使用感を確認する作業は必須であった。こうした院生たちの協力が、春学期の授業体制の特徴でもあった。

その後、いくつかの倫理課題を含む具体的事例を提示し、ブレイクアウトルームでグループディスカッションを行う授業が行われたが、これはZoomによってほとんど問題なく実行できた。初年次の院生たちはそれまで個別に自宅で講義を受ける体験を重ねていたが、オンラインにせよ、グループで同級生たちと交流できるこの機会をことのほか歓迎した。「初めて同級生たちといろいろな話ができてよかった」「様々な意見が出て、やっと大学院に入った気がした」といった感想が数多く見られた。例えば院生室で場を共有するといった体験が、大学院教育においてどれほど大きな役割を果たしているか、オンライン教育やウィズコロナの状況下で3密

を避けるという名目のもとに失われる教育機会がどれほど大きなものか、深く考えさせるコメントであったと言えよう。

その後の授業展開は「公認心理師試験の過去問題の提示」→「ディスカッション」→「解答と解説」で1回、そこで取り上げられた諸検査の「反転授業」で1回、と合計2回1組を1セットにして、4領域（精神科医療、教育、福祉、高齢者医療）にわたって行う、というものであった。具体的に取り上げた心理検査は以下の資料③に見るとおりである。

ここでオンライン状況下特有の問題点として、①反転学習の際の担当者グループが、各心理検査についての学習、情報共有をどのように行うか、②上記の心理検査を教室配布できない状況で、どのように現物の心理検査に触れるか、③実際の反転授業において、レジメの共有、課題提示など具体的な操作について、どこまでサポート体制をとるか、といった課題があった。

①については、担当者グループの割り振り、そのグループに対して昨年度のレジメ資料をサンプルとして送付する、さらにマニュアルを含めた参考資料を担当者グループ全員に郵送する、といった対策が取られた。

②については、同時に院生全員に対して、当該検査の検査用紙、解答用紙を送付頂いた（現実的に府県をまたぐ移動を禁じられていた筆者は、事務の方の多大のご協力を頂いて、この送付を実現して頂いた¹⁾）。

③については、基本的に杞憂であった。担当者は事前に十分な話し合いのもとに役割分担し、割り当てられた時間の中で手際よく解説、

資料③ 「反転授業」で取り上げた心理検査

精神科医療	精神科医療	高齢者医療	教育・福祉	教育・医療
MINI SDS	人物画 バウム	MMSE 長谷川式 (HDS-R)	LDI ADHD-RS AQ	MSPA

採点、結果の解釈の説明などをこなしてくれた。授業担当者の役割としては、ユニパを活用して事前に送られてきたレジメを授業資料として登録すること、前回のコメントや質問に答えること、当日の心理検査についての質問に答え、解説を補足することぐらいであった。

最終的に、WISC-IVの検査実施、心理所見の書き方等の課題は授業カリキュラムに組み込み切れず、例年のごとく自主参加による研究会にその一部を委譲せざるを得ない状況となったが、ウイズコロナの状況下で、どこまでそれが実現できるかは、目下のところ模索中である(昨年度のWISC-IVの実施要領に関しては、M1時代の自主的な研究会で、心理所見の書き方については、今年度に入ってコロナ状況下で行われたM2の病院実習代替授業の中で行われた)。

4. ウイズコロナにおける心理教育—ハイブリッド型という新たな危機

春学期は急激なCOVID-19の蔓延に伴って、大学においては全世界的にオンライン授業が展開された。そうしていったんある程度、新規感染者数が落ち着きを見せ始めている昨今、コロナとの共存を目指す、持続可能な授業形態として注目されているのが、ハイブリッド型という新たな授業形態である。これは厳密に言うと、①対面型と非対面型の学生が、可能な限り同一条件で受けることができる授業形態を毎回実施するハイフレックス型、②各回で対面と非対面を入れ替え、反転授業を利用するブレンド型、③教室の密集を避けるため、学生を複数グループに分け、同じ回に異なる内容を教室とオンラインで行う分散型に分けられるという(中村：2020)。

②は、「心理的アセスメントの理論と実践」の授業において、反転授業としてグループによる発表準備の形で、実際には授業の枠外にディ

スカッションをオンラインでもらって授業枠に発表するという形で実現されていた。これを2グループに分ければ、③の分散型のように半数の生徒が同一内容を別々に受けるという形で実現可能だろう。ただし、教室や通信機器、対応する教員も2倍必要になる。また2グループで同一内容が担保されるよう、メンバーやコンテンツの吟味も重要になろう。

当面、秋学期の大学院講義科目として筆者が予定している「遊戯療法特論」では、例年②の形の授業は組み込んでいる。具体的には授業開始時に、児童心理学者の生涯と理論を一人10分ほどでまとめ、発表するという形を3セット、計30分行うことにしている。反転学習を取り入れた方式であるが、これ自体はオンラインでも対面でも実現可能である。

問題は、課題図書やDVD、動画の視聴を通してのグループ・ディスカッション、事例検討が可能であるかどうか、ということである。登録者数30名の授業で、対面の学生が20名前後、非対面が10名前後の教室の場合、教室内のカメラオン、マイクオフの発言者の声は集音マイクでまとめられ、ZoomやMeetに乗る。オンライン側の学生はカメラ、マイクオンで、教室の音を拾いながら、自分たちの発言を心掛ける。しかし教室では地声とマイクを通過してきた声が微妙にずれてしまう…実際には機械の性能や教室の形状、学生の着席位置などに大きく影響を受けるこうした事態は、まさに毎回の修正の努力のもとに逐次改善されていく性質のものであろう。さしあたり考えられる標準的な対応としては、①教室内外のWifi環境の整備、②学内全域における電源の分散、③教室内音声問題への対応といったところが中心となろう。

ここで重要なのは、上述の中村(2020)が指摘していたように、「ハイブリッド授業は完全オンライン授業の数倍手間がかかる」という点

である。全く新しい、しかも数倍手間のかかり
そうな授業（大講義、小講義、ゼミ、グループ
ワーク、実験、実習など）の形態に合わせて、
どのような対応が必要か、どういった機材、機
器が求められるのかは、始まってみなければ分
からない、大学教育における「新たな危機」で
ある。そういった認識のもと、教員と学生、事
務職員と管理職、法人本部が密接で協力的な関
係を築いていかなければ、恐らくは学生や教職
員から見放される大学に墮することになる。ウ
ィズコロナはこうした理念への梶切りを強烈に迫
る、黒船的な影響力を持っていると言えよう。

注

- 1) ここに特にお名前を挙げて感謝の意を表したい。
網代さん、マニュアルの検索、検査用紙の発注、
振り分けから送付まで、煩雑な作業をありがと
うございました。あなたのお手伝いがなければ、
この授業は成立しませんでした。

<文献（オンライン資料）>

- ・中村素典「ハイフレックス型授業実施のための技
術的検討と支援に向けて」【第16回】4月からの
大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバ
ーシンポジウム 遠隔・対面ハイブリッド講義に
向けての取り組み（9/11 オンライン開催）
[https://www.youtube.com/watch?v=2fpcyAPZh
Z0&feature=youtu.be](https://www.youtube.com/watch?v=2fpcyAPZhZ0&feature=youtu.be)（2020.9.22 参照）

<資料>

①授業資料サンプル

心理学概論

担当: 高石 浩一
第2回

1

第2回 序論
心の科学の生い立ち



2

心理学の誕生まで

B.C.400 ヒポクラテスが性格を体液に関連づける
A.D.400 聖アウグスティヌスがプラトンに影響され
内省主義を主張

1690 ロックが心は元来**タブラ・ラサ**(白紙)と主張
1846 ウェーバーによる感覚の弁別閾の測定
1859 ダーウィン、「種の起源」で進化論を提唱
1860 フェヒナー、「精神物理学原論」
1879 **ヴァント**がライプツヒ大学で**世界初の心理学
実験室**を作る



テキストp.3

3

心理学の研究者とその理論

ヴァント(1832-1920) **構成主義**

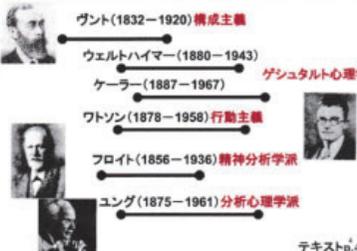
ウエルトハイマー(1880-1943) **ゲシュタルト心理学**

ケーラー(1887-1967)

ワトソン(1878-1958) **行動主義**

フロイト(1856-1936) **精神分析学派**

ユング(1875-1961) **分析心理学派**

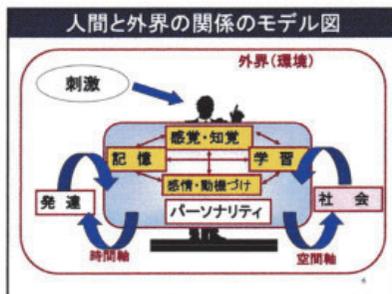


テキストp.4

4

第2回 本論
感覚と知覚～外界をとらえるしくみ

5



6

② Google Forms のサンプル

2020年2月
振り返りシート 第2回
2020年2月
振り返りシート 第2回

振り返りシート 第2回

5/20の講義について書いてください。出席に代えます。
*必須

1. メールアドレス*

2. 学籍番号*

3. 名前*

4. 授業の視聴形式についてお答えください。
1つだけマークしてください。

ライブ授業に参加した。

ライブ授業に参加できず、録画ビデオを見た。

5. 今日の授業で分からなかった心理用語をチェックしてください。
1つだけマークしてください。

チャンク

総括（符号化）、保持（貯蔵）、想起（検索）

感覚記憶、短期記憶、長期記憶

言語的記憶（意味記憶、エピソード記憶）

手続き的記憶

リハーサル（維持リハーサル、精緻化リハーサル、主観的体制化）と再認

忘却（減衰、干渉、検索の失敗）

スキーマ

特になし

6. 今日の講義について質問を書いてください。

7. 今日の講義について感想を書いてください。

このコンテンツは Google が作成または承認したものではありません。

Google フォーム